



# 建築設備技術遺産

特別認定 藤井厚二「聴竹居(自邸)」の建築環境設備技術

管理者:小西伸一・荻野和雄

所有者:小西章子

「聴竹居」は京都帝国大学の建築学科で教鞭をとった建築家の藤井厚二氏の考える「日本の住宅」の理想形を追求した自邸として昭和3年(1928年)に建てられ、京都府大山崎町に今日も現存する。自らが興した環境工学の様々な実験や知見をもとに、日本の気候風土や近代的なライフスタイルに適した住まいとなっている。

「聴竹居」には地中熱を利用して冷えた空気を取り入れるクールチューブ(導気口)や天井換気口など建築的な環境共生技術や、当時の最先端の設備機器である電気冷蔵庫(造り付けでドイツ製)、電気温水器(日本製)、また各室の暖房に藤井厚二氏が自らデザインして造られた電熱器などが当時のまま残されている。

藤井厚二氏は京都帝国大学の建築学科で建築設備講座も担当していた。教え子に前田敏男氏がいる。前田氏は建築環境工学の開拓者であり熱環境工学の確立者でもあり、京都大学総長を歴任されている。

応募の「聴竹居」は、環境装置の組み込まれた住宅であり建築設備技術遺産の定義には該当しない。しかし、環境工学の理論書である「日本の住宅」とその理論を実践して造られた「聴竹居」は、環境共生技術と日本の住宅様式が溶け込んだ先駆的な住宅と言える。建設当時のまま85年の歳月を経て現在も存続し続け、公開しているのは驚異的である。よって建築設備技術遺産認定委員会として、書籍である「日本の住宅」と現存する「聴竹居」と合わせて建築設備技術遺産 特別認定として認定する。



聴竹居 外観



縁側天井排気口



居室導気口(クールチューブ)